The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ナタ形指示詞の空間・時間における方向性 : 平安時代を中心に
Author(s)	藤本, 真理子
Citation	詞林. 2009, 45, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67593
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ナタ形指示詞の空間・時間における方向性

——平安時代を中心に——

藤本　真理子

一　はじめに

ア系列指示詞の一形式「アナタ」の表す時間的方向性については、これまでの辞書的記述や先行研究では、次に示すように「過去」だけでなく、「未来」の意味があるとされてきた。[1]

（1）　a未来（日本国語大辞典）
　　b時間に転用して、現在もしくは、ある時点より過去あるいは未来をさす。（角川古語大辞典）

このアナタに関する「未来」という意味記述は、次の源氏物語の一例に基づくようである。

（2）（明石入道は）あやしく、ひがひがしく、すずろに高き心ざしありと人も咎め、また我ながらも、さるまじきふるまひを仮にてもするかなと思ひしことは、この君の生まれたまひし時に、契り深く思ひ知りにしかど、［目の前に見えぬ］あなたのことは、おぼつかなくこそ思ひわたりつれ。さらば、かかる頼みありて、あながちには望みしなりけり。（源氏物語、若菜上、④128頁）

（2）の例をどのように捉えるかは、諸注釈において議論のあるところであり、「過去」とも「未来」とも解釈されている。[2] 本稿も、この解釈に関してどちらかの立場の明確な証拠を挙げることはできない。

このような問題を含む平安時代のナタ形指示詞（以後、ナタ形とも呼ぶ[3]）は、指示詞の体系的変化にも影響を与えた点が指摘されているが、詳細な検討は未だなされていない。そこで本稿では、平安和文において場所や方向を指示するとされるナタ形指示詞を取り上げ、ア系列「アナタ」とコ系列「コナタ」を中心に、指示詞の空間的・時間的方向性について考察することを目指す。

二　先行研究の整理

現代語では主に対称代名詞として、アナタが用いられているナタ形指示詞は、指示詞の対称代名詞としての働き、また

対称代名詞への変化といった観点からの先行研究が多く（山崎一九六一、荻野二〇〇三）、ナタ形指示詞の本来的な意味や方向性といったものに注意を向けた論はあまり見られない。

しかしながらその中で、次の橋本（一九八二）による中古のアナタに関する記述は、ナタ形がコソカ（ア）の指示詞の領域区分に何らかの変化をもたらしたことを示唆している。

（3）コと切り離され、ソとの直接のかかわりを見出すこともできないアの領域は、まず「あなた」において確立した。主体にとって疎なる領域の対象の指示という点でカと重なりながら、いち早くアの独立を果たしたのである。（橋本一九八六：二四五）

また金水・岡崎・曹（二〇〇二）は、中古語におけるカ系列とア系列との違いを述べる際、不可視の対象を指し示すものとして『伊勢物語』のアナタの例を挙げて説明している。[4]

（4）一方、ア系列は、同じ遠称でも、カ系列とは個性が異なっていたようである。その特徴は、「可視・不可視を問わず、特定の視点から遠方の対象を指し示す」というようにまとめられる。（金水・岡崎・曹二〇〇二：二三二）

このようにナタ形指示詞では、ア系列とカ系列との違いが顕著であり、コソア三系列の指示詞へ、という体系変化の中で果たした役割は大きいと見られる。

次節では、ナタ形指示詞の働きに関して、田窪（一九八四）、金水（一九九〇b）による現代語の場所と方向についての概念整理をもとに、平安時代のナタ形がどのように用いられているかを示す。

三　ナタ形の働き

ナタ形指示詞は、橋本（一九八二）では次のように場所指示と考えられている。

（5）中古に、…チに比して圧倒的な用例数を示す…ナタは、〈略〉のように、格助詞「に」「へ」の接する場合が多い。方向の意の「さま」と複合した「こなたざま」「そなたざま」なども珍しい形ではない。…ナタが本来、方向でなくて場所を指示するものであったことを示すようである。（橋本一九八六：二四三―四）

しかし「さま」の付く名詞には、（6）に挙げたナタ形指示詞の他に（7）のような語もあり、「さま」が後接するからといって、その語が場所であると言うことは難しい。

（6）四尺の屏風を、この障子にそへて立てたるが、上より見ゆる穴なれば残るところなし。こなたをばうしろめたげに思ひて、あなたざまに向きてぞ添ひ臥しぬる。【四尺の屏風をこの襖に添えて立ててあって、その上から穴はのぞける位置にあるのだから、中がまる見えである。こちらのほうを気にしているらし

く、むこうを向いて寄り添い横になった。】（源氏物語、宿木、⑤490頁）

（7）aこの入りつる格子はまだ鎖さねば、隙見ゆるに寄りて西ざまに見通したまへば、この際に立てたる屏風端の方おし畳まれたるに、（略）（源氏物語、空蟬、①119頁）

bいと恥づかしと思ひて、（姫君）「人にもの聞こえむやうも知らぬを」とて奥ざまへゐざり入り給ふさま、いとうひうひしげなり。（源氏物語、末摘花、①280頁）

（7）に挙げた「西」や「奥」の現代語は、同じく現代語の「コチラ類」[6]を考察した金水（一九九〇b）において、「方向性のある相対名詞」[6]（金水一九九〇b：二四）の一群に含まれ、次のように説明される。

（8）「*後ろというところ」「*北というところ」は不可であるが、「冷蔵庫の後ろというところはゴキブリの巣になりやすい」「六甲山の北というところは、今では大ベッド・タウンだ」などとすると可能である。ところが「後ろという方向」「北という方角」などの表現は、補足語なしに可能なのであるから本来方向を表し、基準点を具体的に与えると場所に転ずることができる。（金水一九九〇b：二四）

このことから、中古語のナタ形指示詞も内在的特性として方向性を持つ名詞と推定される。ナタ形は本来、方向性をもっており、次のように述語からの補足語に対する意味選択によって、「場所」名詞に転ずると考えられる。

（9）a（紫の上）「方々におはしましては、あなたに渡らせたまはんもかたじけなし、参らむこと、はた、わりなくなりにてはべれば」とて、しばしはこなたにおはすれば、明石の御方も渡りたまひて、心深げに静まりたる御物語ども聞こえかはしたまふ。（源氏物語、御法、④501頁）［存在の位置］

b今日は、中宮の御読経のはじめなりけり。やがてまかでたまはで、休み所とりつつ、日の御装ひにかへたまふ人々も多かり。障りあるはまかでなどもしたまふ。午の刻ばかりに、みなあなたに参りたまふ。（源氏物語、胡蝶、③171頁）［移動の終点］

四　ナタ形指示詞の表す方向

四・一　ナタ形の形態的特徴と分布

ナタ形指示詞が表す方向は、基準点とコソカ（ア）の三系列の指示詞によって決まる。『源氏物語』においてナタ形指示詞を調査すると、その中でソ系列は地の文中心に用いられ、一方の会話文にはコ系列、カ（ア）系列が多く用いられることが確認できる。

また表1のア系列とカ系列では、ア系列がカ系列より多く、この差が特にナタ形において見られることは、表2（橋本

表1　『源氏物語』におけるナタ形指示詞の地の文と会話文での分布

	地の文	会話文	心内文	手紙	歌	計
コナタ	134	49	1	1		185
アナタ	45	29	2			76
カナタ	29	7	1			37
ソナタ	28	7	1	1	1	38

※アナタは表1－76例、表2－75例とずれが生じているが、これは底本の違いによるものと見られる。

表2　橋本（一九八二：二四三）より

	アレ	カレ	アシコ	カシコ	アナタ	カナタ	アノ	カノ
竹取	0	1	0	0	0	1	2	20
伊勢	0	2	0	1	1	0	0	24
土佐	0	0	0	1	0	0	0	4
大和	0	11	0	1	1	0	0	25
宇津保	6	53	8	83	48	18	6	429
落窪	1	10	0	14	2	0	5	80
蜻蛉	2	19	0	0	13	1	2	18
枕	8	19	0	4	12	5	2	18
源氏	4	89	2	125	75	37	4	730
更級	5	0	0	1	1	0	3	2
大鏡	2	2	0	4	1	0	6	33

※表内の太枠は稿者による。

（一九八二）引用）にも指摘されている。表2からは、ナタ形が他の形式とは異なり、ア系列の数がカ系列を上回っていることが確認できる。この他、橋本（一九八二）や李（二〇〇二）でも指摘されるとおり、中古語で見られるカナタはほとんどがコナタと合わせて用いられており、表2に示した『源氏物語』内のカナタも、37例すべて「コナタカナタ」の組み合わせで現れている。一方、中古語のアナタは単独で用いられることも多く、表1の76例中「アナタコナタ」の形式は1例のみである。[7]

四・二　コ・アとソ

コ系列とカ（ア）系列の指示詞の使い分けは、これまでの分析から次のようにまとめられる（藤本二〇〇七）。[8]

（10）直示空間に存在する対象は、すべてコ系列とカ（ア）系列の指示詞で指すことができ、それらは話し手にとって「近い」「近くない」という対立、すなわち話し手からの距離によって捉えられる。

ナタ形においても変わらず、（10）に示したコ系列とカ（ア）系列の基本的原理は支持できる。これは（11）に挙げる三上（一九七〇：一四九―一五〇）の方向性を持った動詞（例）イク、クル、ヤル、クレルなど）の説明とも併せて考えられる。

（11）動詞の中に、代名詞的な方向性を持ったものが3対

5語ある。

求心的というのは、話手の立っている地点（ココ）へ向かって、または話手の指定する地点（ココ）へ向かっての移動である。それ以外の方向が非求心的である。（遠心的というと、求心的の逆方向に限られ、意味が狭くなる）

本稿で取り上げているナタ形も三上（一九七〇）に即すると、「コナタ」が「求心的」、「アナタ」は「非求心的」と捉えられる。ただし、後で例を挙げるが、移動の向きが話し手に向かう場合に、必ずコナタが用いられるというわけではない。以下『源氏物語』の例を中心にナタ形の実態を確かめていく。

四・二・一　コナタ

「求心的」なコ系列コナタには、（12）のように話し手のいる場所に向かう方向を表す例や、（13）のように話し手のいる場所、または語り手の視点のある場所を起点とした例が見られる。

（12）　a大殿の君達参りたまへど、頭の中将ばかりを、〔源氏〕「立ちながらこなたに入りたまへ」とのたまひて、御簾の内ながらのたまふ。【立ったままこちらへお入りください】（源氏物語、夕顔、①173頁）

b「この笛吹きども、まだいと幼げにて拍子調へむ頼み強からず」と笑ひたまひて、〔源氏〕「大将、こなたに」と召せば、御かたがた恥づかしく、心づかひしておはす。（源氏物語、若菜下、④187頁）

（13）　ゆかしうおぼえてのぞけば、（匂宮）うるはしくひきつくろひたまへる、はた、似るものなく気高く愛敬づききよらにて、若君をえ見棄てたまはで遊びおはす。御粥、強飯などまゐりてぞ、こなたより出でたまふ。【この西の対からお出になる】（源氏物語、東屋、⑥44頁）

またコナタには、金水（一九九〇b：二六）において「視点から離れたところに境界（例えば堀・壁等の建造物、川や海などの地理的障碍、心理的縄張り等）が認識される場合に適用される」と説明される「境界型」の例も確認できる。

（14）　a僧都あなたより来て、〔僧都〕「こなたはあらはにやはべらむ。今日しも端におはしましけるかな。（略）」とのたまへば、（略）【ここはまる見えでしょう。】（源氏物語、若紫、①208頁）

b中将の君、久しく参らぬかなと思ひ出できこえたまひけるままに、有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなくて、やつれておはしけり。川のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。【川のこちら側】（源氏物語、橋姫、⑤136頁）

（14）の境界型でもコナタは、話し手のいる側、または視点のある側を表している。

四・二・二・二　アナタ

四・二・一節で見たコナタに対し、アナタは次のように、話し手、語り手の視点から遠ざかる方向、またはその視点から離れたところから向かう方向を示す。

（15）　a ありつる衣の音なひしるきけはひして、母屋の御障子より通りて、あなたに入るなり。宮の歩みおはして、（匂宮）「これよりあなたに参りつるは誰そ」と問ひたまへば、「かの御かたの中将の君」と聞こゆなり。【ここから（襖の）向こうへまいったのは誰だ】（源氏物語、蜻蛉、⑥269頁）

b（女房）「いでや、よろづ思し知らぬさまに、大殿籠り入りて」など聞こゆるをりしも、あなたより来る音して、（紫）「上こそ。この寺にありし源氏の君こそおはしたなれ。など見たまはぬ」とのたまふを、（略）【向こうから来る音がして】（源氏物語、若紫、①238頁）

李（二〇〇二）も「あなた」の基本的な意味を、「ある境界線を挟んだ向こう側の空間を指す」としており、「向こう側」と説明することによって、「こちら側」、すなわち（11）（12）のコナタで確認した、話し手、語り手の視点を中心とした空間が存在することが前提となっている。

さらにアナタについても（14）のコナタの例と対応する「境界型」の例が確認できる。

（16）　a 君は、とけても寝られたまはず、いたづら臥しと思さるるに御目さめて、この北の障子のあなたに人のけはひするを、こなたやかく言ふ人の隠れたる方ならむ、あはれや、と御心とどめて、（略）【（源氏は）お目が冴えてしまわれて、このすぐ北側の襖の向こうに人の気配がするのを、ここがあの話の女の隠れている所だろう、かわいそうな、と気になるので】（源氏物語、帚木、①97頁）

b 津の国までは舟にて、それよりあなたは馬にて急ぎ行き着きぬ。【摂津国までは船で、それから向こうは馬を用いて、急いでかの浦に行き着いた。】（源氏物語、澪標、②289頁）

この「あなた」は、（16a）「北の障子」、（16b）「津の国」を境として視点のある側とは反対側を指している。このような「境界型」のアナタは、古今集にも次のように確認できる。

（17）　冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらん【冬でありながら空から花が散ってくるのは、雲の向こうは春であるのだろうか。】（古今和歌集、330、雲の降りけるをよみける、清原深養父）

四・二・三　ソナタ

ソナタに関しては、他の二系列、コ・カ（ア）とは異なり、ほとんどの例が（18）のように指示対象が言語的先行文脈に依存して、文脈指示として働く。（18）ではそれぞれ波線部が先行文脈となっている。

（18）　a 年いたう老いたる典侍、人もやむごとなく心ばせありて、あてにおぼえ高くはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたにはおもからぬあるを、かうさだ過ぐるまでなどさしも乱るらむ、といぶかしくおぼえたまひければ、（略）【ひどく好色な性分で、その方面では重くない女がいるのを】（源氏物語、紅葉賀、①336頁）

b（仲人→少将）「北の方も、かの姫君をばいとやむごとなきものに思ひかしづきたてまつりたまふなり。ただ、なかのこのかみにて、年も大人びたまふを心苦しきことに思ひて、そなたにとおもむけて申されけるなりけり」と聞こゆ。【ただ、さきの姫君は姉妹の方々のなかでいちばん年上で、年もいっていらっしゃるのをかわいそうに思って、そちらのほうへ仕向けてご返事申されたわけだったのです。】（源氏物語、東屋、⑥32頁）

c（石近→浮舟）「一方に思し定めてよ。宮も御心ざしまさりて、まめやかにだに聞こえさせたまはば、そなたざまにもなびかせたまひて、ものないたく嘆かせたまひそ。」【宮も、お気持が大将殿よりも深くて真剣にそうおっしゃってくださるのでさえあれば、そちらへお定めなさいまして、（略）】（源氏物語、浮舟、⑥179頁）

ソナタでは、観念指示や曖昧指示[9]の例が見られない点も一つの特徴と考えられる。藤本（二〇〇八）では、中古語の場所指示ソコに（19）のような聞き手を指し示す例があることを述べたが、ソナタにはこのような例はほとんど見当たらない。

（19）　a 例の、中将の君、こなたにて御遊びなどしたまふに、抱き出でたてまつらせたまひて、（帝→源氏）「皇子たちあまたあれど、そこをのみなむかかるほどより明け暮れ見し。」【あなただけを、このように幼い頃から明け暮れ見ていた。】（源氏物語、紅葉賀、①329頁）

b（源氏→夕霧）「それは、かりそめならず命長き人々にも、さやうなることのおほかたすくなかりける、みづからの口惜しさにこそ。そこにこそは、門はひろげたまはめ」などのたまふ。【あなたこそは、家門を広げてください。】（源氏物語、幻、④541頁）

ソナタが聞き手（受け手）を表すと考えられるのは、（20）

のような手紙の例や、使いの者への伝言を通しての発話、もしくは（21）のようにコ系列とともに用いられ、対立的な使用が明らかな場合である。

（20）a〔源氏→大宮・手紙〕「あからさまに立ち出ではべるにつけても、今日までながらへはべりにけるよと乱り心地のみ動きてなむ、聞こえさせむもなかなかにはべるべければ、そなた（＝大宮のいるところ）にも参りはべらぬ。」とあれば、いとどしく宮は目も見えたまはず沈み入りて、御返りも聞こえたまはず。（源氏物語、葵、②62頁）

b〔御息所→（使者）→落葉の宮〕「かうすこしものおぼゆる隙に渡らせたまふべう聞こえよ。そなた（＝落葉の宮のいるところ）へ参り来べけれど、動きすべうもあらでなむ。見たてまつらで久しうなりぬる心地すや」と、涙を浮けてのたまふ。（源氏物語、夕霧、④420頁）

（21）〔源氏→内大臣〕「なほ、しばしは御心づかひしたまうて、世に譏りなきさまにもてなさせたまへ。何ごとも、心やすきほどの人こそ、乱りがはしう、ともかくもはべべかめれ、こなたをもそなたをも、さまざまの人の聞こえなやまさむ、ただならむよりはあぢきなきを、なだらかに、やうやう人目をも馴らすなむ、よきことにははべるべき」【私のほうもあなたのほうも】（源氏物語、行幸、③318頁）

（21）は、「コ」と「ソ」との対立関係によって、ソナタは話し手の源氏に対する聞き手の内大臣を表すように見える。

四・三　ナタ形とコ形

ナタ形と類似した意味をもつコ形は、四・二・三節のソナタで示したように、ともに「場所」という範疇に含まれながら、ナタ形とは異なるふるまいを見せる。ここでは、概観的調査ではあるが、会話文か地の文かによってナタ形とコ形とを分類した結果を示す。

表3（次頁）からは、カシコ、アシコを除くコ形が会話文に多いのに対し、ナタ形は地の文に多く用いられていることに気づく。カシコに関しては、対応関係にあると見られるカ系列のナタ形がコ系列と切り離された単独の形式では現れないということも何らかの影響を与えているであろう。これらの分布状況については、今後詳細に検討したい。

表3　会話文と地の文におけるナタ形とコ形の分布

	地の文	会話文	心内文	手紙	歌	計
コナタ	105	41		1		147
ココ	83	116	8	6		213
アナタ	45	28	2			75
アシコ	1	1				2
カナタ						0
カシコ	49	31	3	2		85
ソナタ	28	7	1	1	1	38
ソコ	6	18				24

※「ソコ」に関しては、「ソコハカト」「ソコラ」「ソコドコロ」など岡崎（2006）において曖昧指示表現とされる表現は表3の数値に含めていない。

※表3では、「コナタカナタ」「ココカシコ」また「アナタコナタ」の例は省いているため、表1とは数値が異なる。

五　空間から時間へ

前節までナタ形のコソアが示す空間的方向性について考察してきた。本節ではそれに対応させる形で時間的方向性について述べる。

視覚的な動機付けが指示の基礎を成していると考えた場合、時間は最も抽象的で見えにくく、視覚的に捉えることができないものである。そのため、時間表現は、空間的なものからの転位によって表わされることが多い。この現象は日本語に限らず、通言語的に見られることが知られている。[19]

五・一　コ系列の時間的方向性

コナタの時間的方向性は空間的方向性と一致している。(22)のコナタは、話し手の発話している現在に向かう方向を指し示しており、(23)は話し手の発話している時点を起点として用いられている。

(22)　a〔明石入道・手紙〕「何ごとにつけてか、さるいかめしきことをば待ち出でむと心の中に思ひはべしを、[そのころより孕まれたまひにし]こなた、俗の方の書を見はべしにも、また内教の心を尋ぬる中にも、夢を信ずべきこと多くはべしかば、（略）【さてどういうことをきっかけにしてそうしたたいそうな幸運を待ちもうけることができるのだろうかと、心の中に思っておりましたところが、そのころからあなたが尼君の御腹に宿られまして、それ以来、俗世間の書物を読んでみましても】（源氏物語、若菜上、④114頁）

b公私のことにふれて、なのめならず思ひのぼりし

かど、その心かなひがたかりけりと、一つ二つのふしごとに、［身を思ひおとしてし］こなた、なべての世の中すさまじう思ひなりて、後の世の行ひに本意深くすすみにしを、（略）【公私のことにつけて、並々ならぬ高い気位を持していたのであったけれど、その望みもなかなか思うようにはならぬものであったと、一度二度とつまずきを重ねるうちに、だんだん自分を無力なものと思いおとしてきて以来、およそこの世の中がおもしろくなくなってきて】（源氏物語、柏木、④289頁）

（23）

a（式部卿宮→娘）「［おのがあらむ］こなたは、いと人笑へなるさまに従ひなびかでも、ものしたまひなむ」とのたまひて、（略）【「わたしの生きているうちは、大変もの笑いになるような格好で言いなりにならなくとも、きちんとお過しになれよう」とおっしゃって】（源氏物語、真木柱、③358頁）

b（明石の君→明石女御）「世の中定めがたければ、うしろめたさになむ。［何ごとをも御心と思し数まへざらむ］こなた、ともかくもはかなくなりはべりなば、（略）【（あなたが）何事でもご自身でご判断おできにならないうちに、もしもこの私が亡くなるようなことにでもなりましたら、気がかりで。】（源氏物語、若菜上、④122頁）

（22）では、（a）「そのころより孕まれたまひにし」、（b）「身を思ひおとしてし」の時点が参照点として設定され、コナタはその時点「以来（から）」話し手の発話する現在までといった意味を表している。また（23）のコナタは、発話時現在から（a）「おのがあらむ」や（b）「何ごとをも御心と思し数まへざらむ」の状態が持続している期間を表すことになる。

五・二　ア系列の時間的方向性

本稿で調査した『源氏物語』では、（2）の例を除くと、次のように「過去」を表す例のみ確認できる。[11]

（24）

aさる方にありつきたりしあなたの年ごろは、言ふかひなきさびしさに目馴れて過ぐしたまふを、なかなかすこし世づきてならひにける年月に、いとたへがたく思ひ嘆くべし。【そうした貧しいお暮しが普通になっていた昔の幾年かは】（源氏物語、蓬生、②327頁）

b（源氏→夕霧）「御息所の忌はてぬらんな。昨日今日と思ふほどに、三年よりあなたのことになる世にこそあれ。」【昨日今日と思っているうちに、三年より昔（前）のことになる世の中だなあ。】（源氏物語、夕霧、④457頁）

（24）は、話し手がいる現時点から遠ざかる方向、または

「今」に対する「過去」といった時間的方向性を持つと見られる。アナタは（10）で述べたア系列の「話し手にとって近くない」という性質上、「現在」に対する「非現在」を表すと考えられる。時間と空間とに対応関係があるとするならば、アナタに未来を表す例があってもよいのであるが、実際には見当たらない。アナタに未来を表す例が見られない理由はよく分からないが、意味的に「過去」に偏る理由はある程度説明できる。

アナタ以外のア系列の指示詞「アレ」「アノ」などの形式が、現場にある対象を指示する場合ではなく、今、目に見えない、直接知覚、感覚できない対象を指示する場合に目を向けると、これらは、話し手が直接的に経験した対象すなわち「過去」と結びついた対象を指すことが多い。（25）の例はどちらも既に話し手が記憶している対象をカ（ア）系列で指し示している。

（25）a（内大臣が夕霧を見ながら）北の方、若き女房などに、「かれ（＝夕霧の父、光源氏）はただいと切になまめかしう愛敬づきて、見るに笑ましく、世の中忘るる心地ぞしたまふ。（略）これ（＝夕霧）は才の際もまさり、心用ゐ男々しく、すくよかに、足らひたりと世におぼえためり」などのたまひてぞ対面したまふ。（源氏物語、藤裏葉、③436頁）

b（若い）女房などは、（夕霧を）のぞきて見きこえて、「いとありがたくも見えたまふ容貌、用意かな。あなめでた」など集まりて聞こゆるを、老いしらへる（＝年寄りの女房）は、「いで、さりとも、かの院（源氏の君）のかばかりにおはせし御ありさまには、えならずひきこえたまはざめり。いと目もあやにこそきよらにものしたまひしか」など、言ひしろふを聞こしめして、（朱雀院）「まことに、かれ（＝源氏の君）はいとさまことなりし人ぞかし。」（源氏物語、若菜上、④25頁）

また指示が蓋然性に基づいていると考えるならば、既に事実として認識されている過去の出来事に対し、未来はやはりモーダルなものであり、指示することが難しいと考えられる。

以上のような理由から、日本語の指示詞カ（ア）系列の場合、空間的方向性とは異なり、時間的方向性における遠近は必ずしも、〈現在〉と〈非現在〉の対立を持っておらず、〈非過去〉と〈過去〉のように捉えられる。

六　まとめ

以上、本稿では、これまでほとんど取り上げられることのなかった平安時代のナタ形指示詞の意味と方向性について考察した。これによってナタ形指示詞に関しても、話し手にとっての近接性というコ系列、ア系列の指示の基本的原理の上に用いられていることを確認した。ただし、ここで見てき

たように、コナタとアナタとの対立関係は、この基本的原理に即しながらも、空間的方向性と時間的方向性との間で異なりを見せる。コ系列コナタには空間と時間の方向性に、話し手にとって「求心的」であるという対応関係の一致が見られる。一方のア系列アナタは、空間的方向性においては「非求心的」であるが、時間的方向性に関しては、〈現在〉と〈非現在〉というよりも、〈非過去（現在）〉と〈過去〉という偏りを見せることを指摘した。

注

(1)李長波（二〇〇二：一八五）も、(2)の例を挙げて、「今より未来の時間を指していると考えられる」と述べている。

(2)新編日本古典文学全集頭注では、『湖月抄』の「見ぬ已前の因縁はしらぬ事なりしにと也」が引用されており、「この目に見たわけではない遠い昔のこと」という解釈がなされている。

(3)コナタやアナタを含む―ナタの形式の指示詞の語構成は、「―ナタ」であるか「―ナ―タ」であるか判然としない。本稿では、便宜上、李（二〇〇二）で用いられている「ナタ形指示詞」という名称を用いて、これらの指示詞を表す。

(4)『伊勢物語』に見られるアナタは次の例である。

(i)むかし、惟喬の親王と申すみこおはしましけり。山崎のあなたに、水無瀬といふ所に、宮ありけり。年ごとの桜の花ざかりには、その宮へなむおはしましける。【山崎の向こうで、水無瀬という所に、離宮があった。】（伊勢物語、八十二、183頁）

(5)「コチラ、ソチラ、アチラ、ドチラ」「コッチ、ソッチ、アッチ、ドッチ」が含まれる（金水一九九〇b：二二）。

(6)「後ろ、前、左、右、上、下、東、西、南、北、となり、…」（金水一九九〇b：二三）

(7)本稿では、以後カナタは議論の対象からはずす。ただし、以降も指示詞の系列名を述べる際、カ（ア）系列と呼ぶこともある。

(8)中古語に関しては、藤本（二〇〇七）においてカ（ア）系列の指示の性質について述べた。現代語でも、田窪（二〇〇八）によって、コ系列・カ（ア）系列の指示詞は［+Proximal］［-Proximal］の素性を用いて説明されている。

(9)観念指示、曖昧指示については岡崎（二〇〇六）に詳しい。

(10)Lakoff, G.（1990）の不変性仮説でも次の説が提案されている。

(ii)我々の視覚システムには物体の運動を感知する器官や物体や場所を関知する器官はあるが、時間を関知する器官（これがどのようなことを意味するのかはさておき）は存在しない。つまり、時間がものや運動の観点から理解されているというのは生物学的にも充分意味をなすことなのである。（二九頁）

(11)他に時間的方向を表すアナタには次のような例も見られる。いずれも方向として「過去」を指している。

(iii)昨日今日と思すほどに、三十年のあなたにもなりにける世かな。かかるを見つつ、かりそめの宿りをえ思ひ棄てず、木草の色にも心をうつすよ、と思し知らるる。【三十年も昔のことになる世の中だなあ】（源氏物語、朝顔、②482頁）

(iv)さあらむを、昨夜も、昨日の夜も、そがあなたの夜も、すべてこのごろ、うちしきり見ゆる人の、今宵いみじからむ

雨にさはらで来たらむは、なほ一夜もへだてじと思ふなめりと、あはれなりなむ。【ゆうべも、昨日の夜も、その昨日の前の日の夜も】（枕草子、第二七四段、425頁）

調査資料

伊勢物語：『竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』、新編日本古典文学全集12、小学館

源氏物語：『源氏物語』①～⑥、新編日本古典文学全集20-25、小学館

枕草子　：『枕草子』、新編日本古典文学全集18、小学館

参考文献

岡﨑友子（二〇〇六）「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について―ソ系（ソ・サ系列）指示詞再考―」『日本語の研究』二-二、七七-九二頁、日本語学会

荻野千砂子（二〇〇三）「指示詞から人称詞へ―「～ナタ」系語の変遷―」『語文研究』、九五、六三-七五頁、九州大学国語国文学会

金水敏（一九九〇a）「〈特集・談話研究の新展開〉指示詞と談話の構造」『言語』、一九-四、六〇-六七頁、大修館書店

金水敏（一九九〇b）「方向と選択―コチラ類の指示詞―」『日本語学』、九-三、二二-三〇頁、明治書院

金水敏・岡崎友子・曺美庚（二〇〇二）「指示詞の歴史的・対照言語学的研究―日本語・韓国語・トルコ語」生越直樹編『シリーズ言語科学4　対照言語学』、二一七-二四七頁、東京大学出版会

田窪行則（一九八四）「現代日本語の場所を表す名詞類について」『日本語・日本文化』、一二、八九-一一七頁、大阪外国語大学研究留学生別科

田窪行則（二〇〇八）「日本語指示詞の意味論と統語論―研究史的概説―」『言語の研究―ユーラシア諸言語からの視座―』（『語学教育フォーラム』第一六号）、三一一-三三七頁、大東文化大学語学教育研究所

橋本四郎（一九八二）「指示語の史的展開」『講座日本語学2　文法史』、二一七-二四〇頁、明治書院、（『橋本四郎論文集　国語学編』（一九八六）角川書店、二二八-二五〇頁に再録）

藤本真理子（二〇〇七）「古代語カ（ア）系列指示詞の定義について」、第一回指示詞研究会発表資料、大阪大学

藤本真理子（二〇〇八）「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』、九〇、四〇-五三頁、大阪大学国語国文学会

三上章（一九七〇）「コソアド抄」『文法小論集』、一四五-一五四頁、くろしお出版、（金水敏・田窪行則編『指示詞』日本語研究資料集【第1期第7巻】（一九九二）ひつじ書房、三三五-三七頁に一部再録）

山崎久之（一九六一）「「おまへ」「あなた」の発生は待遇表現体系にどんな影響を与えたか」『國語學』、四五、一-一四頁、武蔵野書院

李長波（二〇〇二）『日本語指示体系の歴史』、京都大学学術出版会

Lakoff, George (1990) 'The Invariance Hypothesis : is abstract reason based on image-schemas?' *Cognitive Linguistics* 1-1（杉本孝司訳（二〇〇〇）「不変性仮説―抽象

推論はイメージ・スキーマに基づくか？」『認知言語学の発展』、一―五九頁、ひつじ書房）

（ふじもと・まりこ　本学大学院博士後期課程）